

# 音楽教育とハイテク

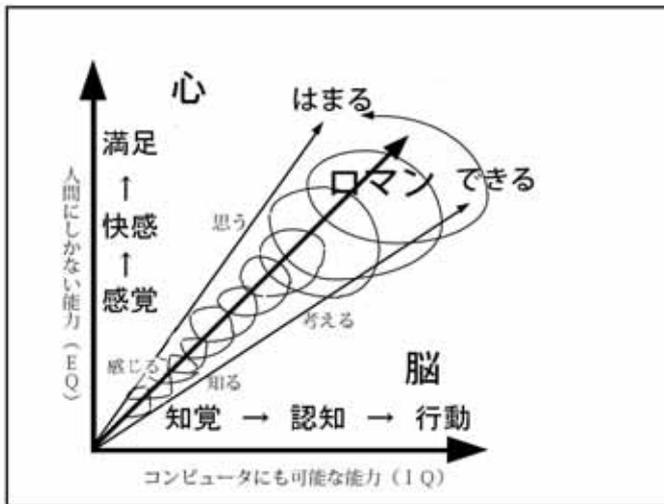
Music Education and High-technology

自然な聞こえ方(11)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

## 心地よい音楽

SML理論ではSすなわちSoundの世界を【知覚】と【感覚】に分けます。分けると言っても二分するのではなくベクトルの違いとして2次元で説明しています。



ベクトルの一つは縦軸の方向で**感覚 快感 満足**という快樂志向の動物だけにあるいわば本能的な行動です。もう一方のベクトルは横軸上に展開する**知覚 認知 行動**という今やコンピュータやロボットにその領域を奪われつつあるこれも人間の知的な行動です。現代の医学会でも【脳】の働きと【心】の働きは分けて考えており、【心】は脳の働きの一部であり脳と運命共同体であることを承知しながらもコンピュータに置き換えられない独特の機能を持つことを認めています。

【認知】に関係するいわば認知のための認知能力としてしばしば【メタ認知】と呼ばれる能力の多くは【パターン認識】と呼ばれる領域です。我々は生まれた直後はこのメタ認知のために学習されたパターンを一切持たないため【感覚】のみに頼って生きています。最初のパターン認識として母親の母乳の匂いだけに反応したり、母親の声だけに反応するのもこの鋭い感覚のなせる業です。多くの動物は生涯この感覚を利用します。そのため絶対音感はずべての動物にとって生きるために必要な感覚なのです。人間の乳幼児もすべて【生来絶対音感を持っている】という仮説は近年多くの研究者が証明しています。つまり、絶対音感というのは後から学習して身につくのではなく、生来動物的本能としてあらゆる人間に備わっている感覚なのです。最近はずっかり聞かなくなった絶対音

感を身につけるためのメソッドや訓練法は本来あるものを呼び覚ます訓練だったのでしょうか？

とにかく絶対音感の電話の基本料金みたいに使っても使わなくても誰にもあるものであることは確かです。文科省が学習指導要領で【移動ドを原則とする】という例外も認める指導を戦後60年も続けているのは【移動ドが出来ない】大人やこどもが現実に居るのを視野に入れて指導しているだけのことで、いわゆる名曲が【移動ド】を原則とした【相対音感】で作曲され演奏されているにもかかわらずそれが【絶対音の組み合わせ】としか認知できない人たちの文化も否定できないから認めているに過ぎないのです。

幼児はまだ日本語の【聞く・話す】が十分にできない頃英語やフランス語の聞く話すを同じくらいにできます。語学教育を早期にという人たちの多くはこの経験に基づいています。しかし、ひとたび日本語を50音で【読む・書く】という学習が始まると、急速にこの外国語に対する【聞く・話す】適応力が低下します。やがては、カタカナに当てはまらない外国語は聞き取ることもできなくなります。われわれの言葉を聞き取るメタ認知としてカタカナが最優先された結果です。音楽も同様に無限に近い音の中から特定の音だけに反応するようになったのが絶対音感で、特にピアノの平均律だけに反応するタイプが多いようです。それに対して【基準音】や【音程】という【概念】で相対値をメタ認知とするのを【相対音感】と言うわけでこれがホモホニーやポリホニーの原点です。

20ヘルツから20,000ヘルツの範囲内の音でわずかなピッチの違いまで弁別出来るのは1500種類であるとされます(音の信号そのものは400,000種類の弁別が可能)。半音の10分の1(10セントと言う)程度のピッチの違いは特に音楽的訓練を受けていなくても弁別できるのです。にも係らずこの中のたった88音だけを絶対音としてメタ認知の道具にしてしまったのが【ピアノ絶対音感】です。それに対して相対音感の音と音の比較値を【音程という概念】で認知するメタ認知ですからほぼ全音域において【基準音】とその他の音との関係(音程)で音楽を認知します。

感覚で得られた結果を調という概念や旋律・和声という概念で再構築して【料理を味わう】みたいに【加工された音を吟味する】過程を持たない【素材丸かじり】の絶対音感では、フランス料理みたいに素材の組み合わせと調理の工夫でできた調性を主体とした西洋音楽は心地よく聞こえるわけがないと思うのですが・・・